

大盛堂書店 2F通信

Vol.54

今号では全国の「山本書店員」アンケート特集です。ご一読を。

山本

〒150-0042

東京都渋谷区宇田川町22-1

TEL 03-5784-4900

※WEBサイト「版元ドットコム」でもご紹介頂けます。

アンケート特集

「今年の“山本書店員”がおすすめする作家さんはこの人だ！」

2016年、押したい作家さんを、全国の「山本」姓の書店員が表明します。この一年ぜひぜひご注目ください。

アンケート設問①おすすめする作家さん、②その理由、③他におすすめしたい作家さん、または回答者、自店のPR

○山本 明広 〈アマノアクト北店・静岡県浜松市〉

①彩瀬まるさん

②彩瀬まるさんの作品、読んで胸が痛くなるんですよ、ヒリヒリしますよ。その名のごとく彩り鮮やかな情景を思い浮かべさせる表現と、自分にも思い当たる節があるようなちょっと不器用な登場人物の言動や心の動き。どこか物足りない、だけど一生懸命生きてるのが伝わってきて、自分も変わらなきゃって思わせてくれる、そんなところに胸を打たれるのです。「おいおい、もうとくに『これから期待』どころじゃないだろう」という声も聞こえてきそうですが、2015年、『あのひとは蜘蛛を潰せない』が初の文庫化となり、「文庫になったら読もうかな」と思っていた人がついに手を伸ばし始めた作家さん。というわけで、地方のいち文庫担当者としては、「やっときた！これからだ！」って感じな

のです。第二第三の文庫化作品、待ってます。そしてなにより、いち書店員としては、それを読んだら「文庫じゃなくても買っちゃおう！」ってなってくれることを期待しているのです。

③本とサッカーとPerfumeを愛する書店員。静岡書店大賞実行委員として第一回から活動しております。浜松駅から歩いて行ける距離で市街地にありながら駐車場完備とアクセスしやすい店で、本だけでなく、文具も豊富に取り揃えております。

○山本 机久美(さくみ) 〈柳正堂書店オギノ湯村SC店・山梨県甲府市〉

①下村敦史さん

②江戸川乱歩賞を受賞してデビューされ、わずか一年の間に3作品を世に送り出すという偉業を成し遂げられました。ミステリーと言えど、3作品共に異なったテーマにチャレンジしているのが素晴らしいです。そしてどれもみなクオリティが高く、臨場感たっぷり。ハラハラドキドキが止まりません！

③書店員歴10年目。文芸・文庫・新書を担当しています。小説を読む&POPを作ることが大好き！売場で手直しをしながら(手直しをしている風を装って(笑))いろんなお客様と本のお話をする時間が何よりも楽しみです。

☆自店PR

武田信玄公のお膝元、山梨県甲府市北部の温泉街近くのショッピングセンター内にある当店は、店内広々バリアフリー。お客様からお気軽にお声をかけていただけるような、明るくあたたかい雰囲気作りを心がけています。

○山本 京子 〈ブックスキューブリックけやき通り店・福岡県福岡市〉

①鹿子裕文さん

②「ヨレヨレ」という雑誌をご存知でしょうか？福岡の小さな介護施設「宅老所よりあい」の日常を描く雑誌で、編集をはじめ一人で担っているのが鹿子裕文さんです。ドタバタな日々を笑いや涙で綴ります。そんな鹿子さんの初の著書「へろへろ」が出版されました。「宅老所よりあい」への愛のある温かい眼差しを感じるこの出来る本です。介護の現場から発信される現実、もがき、楽しさ・・・すべてが目から鱗です。

③ブックスキューブリックけやき通り店に勤務してます山本京子です。書店員歴は7+7年(ブランクあり)、山本歴は14年です。ブックスキューブリックは福岡市にけやき通りと箱崎に2店舗あり、私が勤務するけやき通り店は15坪の店内に店主がセレクトした選りすぐりの本がぎっしり詰まっています。箱崎店はカフェを併設しており、イベントも数多く開催しています。九州にお越しの際はぜひお立ち寄りください。

○山本 千結 〈丸善岡山シンフォニービル店・岡山県岡山市〉

①山本容子先生

②都会的で洗練された色彩で描かれるシーン、どこか間の抜けてクスツと笑えるシーン。一度見たら忘れられない。山本容子先生と言えば説明不要ほど有名な魅力あふれる銅版画家です。版画家のイメージが強いですが、先生の瑞々しい感性で書かれたエッセイはユーモア溢れとても爽やか。絵と文の両方で人の心を揺さぶることの出来る真の表現者だと思います。ますますのご活躍を期待して、山本容子先生を選びました。余談ですが、山本先生は私が初めて直接お会いした作家さんです。憧れの先生を前にして緊張するわたしに「あら！あなたも山本なの。じゃあ『山ちゃん』同士じゃない〜山本は沢山いるけどなかなか出会えないのよ！」とお声をかけてくださり「山本という名字は特別だわ」と思ったきっかけなのでした(笑)

③日本三大名園のひとつ後楽園を中心とする、岡山のカルチャーゾーンと呼ばれる文化的な場所にある丸善で働いています。10代の頃ロングステイした南米で日系人の人達の本に対する想いを知って感激。単純なのでそのまま書店員になりました。「言葉」が生まれて「文字」として具現化してひとつの思想として

「本」になる。世の中には山のように本（山のように本、あら、略したら山本だわ）が存在しますがこんな風に考えるとなんだかロマンを感じませんか？こんな事ばかり考えていたらいつの間にか専門書で8年目を迎えていましたが、毎日新しい発見があり本屋ってつくづく楽しいなあと思います。書店員に会うこともリアル書店の楽しみのひとつだと思うので、ぜひ岡山にお立ち寄りの際は丸善に会いに来て下さいね！岡山の書店員は熱い人が多いですよ～！

○山本 菜緒子 〈紀伊國屋書店グランフロント大阪店・大阪府大阪市〉

①原田ひ香さん

②初めて読んだのは離婚して居場所をなくし、事故物件に住んで浄化(ロンダリング)する仕事を始めた女性を描く『東京ロンダリング』。設定の特殊さと主人公自身の人生の再生が見事に絡んだ物語で、淡々と語りながら小さな変化を丁寧に重ね、じわじわと緊張を解いていくような巧みに、一冊でも私はこの人のとりこになりました。母を欲する子供たちの家を流浪する女を描いた『母親ウエスタン』。ある女性がひとつの時代を生き抜いた証が、現代の女たちの生き方へつながる『彼女の家計簿』。人生のままならさ、登場人物たちの抱える空虚を見つめる視点が鋭くて、愛とか情とかわかりやすい感情の狭間をきりきりと突いてくる。『人生オークション』のように、人生の再出発を少しコメディ風に描いても上手い。とにかくどの作品もちょっと変わった設定で飽きさせず、外れがありません。2015年は『三人屋』、『ギリギリ』、『復讐屋 成海慶介の事件簿』の三作が上梓され、特に『復讐屋』はこれまでの原田さんの作風から一歩踏み出した痛快なリベンジコメディです。キャラクターも立っており、これはあの『謎解きはディナーのあとで』のように映像化されたらかなり受けるのではないかと勝手に夢想したり。2016年、原田ひ香さんはどんな物語で魅せてくれるのか、ぜひ未読の作品がある方は予習をして、一緒にわくわくしていただきたいです。

③大阪の紀伊國屋書店グランフロント大阪店に働いています、【山本】です。大阪にお越しの際は是非お立ち寄りください。「山本本」が本とお客さまの出会いのきっかけ作りの一助になれば嬉しいです。

○山本 護 〈紀伊國屋書店熊本はません店・熊本県熊本市〉

①彩瀬まる

②初春。1年の中で最も私の好きな季節。それは優しく陽光のような温かさとき折降る雨のような冷たさが同居している。文体としてどちらの側面をも併せ持つ類まれなる作家である。今回お題をいただいた「期待の作家さん」を数多く輩出している「R18文学賞」出身者の中でも、窪美澄さん、吉川トリコさん、宮木あや子さんと並んで私の好きな作家さんである。『あのひとは蜘蛛を潰せない』での人間関係に対する葛藤と折り合いの「感情」を描く様。『骨を彩る』の各話でリンクする登場人物たちの心理、描写が綺麗で優美でありながらも、胸の奥に潜む影を等身大の姿で浮かび上がらせる筆致。作品自体のタイトルや帯文の誘惑に抗えないまま手に取ると、会おうたびに日常での気づきを与えてくれる。前を向いて歩こう、そう言うように彼女の作品に勇気づけられる私がいる。

③また彩瀬まるさん以外にも絶賛おすすしたい作家さんとして、額賀澤さんを挙げたい。デビュー作の青春小説が素晴らしく、今後も楽しみな作家さんである。

○山本 亮 〈大盛堂書店・東京都渋谷区〉

①山白朝子さん

②今年はこの方の「名前」に注目したいところ。というのは、2月に発売される『メアリー・スーを殺して』（朝日新聞出版）というアンソロジーに山白さんが書かれている二編がとても素晴らしくて。筋書の良さ、心を切り刻まれるような緊密さ、そして人生の刹那を描くその才能の凄さに唖然としました。ホラ

一系の雑誌に書かれている方ですが、ぜひ普遍的（こういっていいものか）な題材の作品を書いてもらいたいな、と。

③ここで改めて書くのもなんですが（笑）東京の渋谷駅すぐスクランブル交差点を渡りセンター街入り口にある店舗です。決して大きくはない店ですが、各階いろいろと趣向を凝らしておりますので、ご来店をお待ちしております。

*熱い「山本」押しの数々いかがでしたでしょうか？ぜひぜひ、回答者のお店にご来店ください。また、皆さまの周りにいらっしゃる「山本書店員」の方がおられましたら、よろしければご一報ください。そして、その先の「山本本大賞」が実現できることを祈念して止みません！（笑 いやいや、もちろん本気です！）

連載コラム

猿 のでどころ

第30回 景文館書店・荻野

道、進、返、逆、速。

これらの漢字、うまく書けますか？僕はまあ、無理です。無類の悪筆ですし、なかでもこいつら「しんによう」……ムリ！なんですか、この「しんによう」という「偏」のかたちは。人生で一度も上手に書けたことがない…。

じぶんの中の連想ゲームですが、「道」という字を書くと思出す本が『日本の弓術』（オイゲン・ヘリゲル、岩波文庫）。日本の大学に赴任してきたヘリゲル氏が、弓術を習い、近代西洋哲学とは異なる世界に目を開いていく…そんな体験記ですね。僕は中学から高校一年まで弓道部で、技術も精神もさして高まりはしませんでした。迷いなく部活に弓道部を選ぶ程度には、「弓道」なるものが含んでいるものに、子供の頃から魅力を感じていました。

「術」か「道」か。武道をする人の中には表記にこだわる考え方もあります。こだわるというか、表記の違いに伴って中身が違う、ということですね。僕自身は表記はどちらでもいいかなと思っています。でもたとえば柔術ではなく柔道という言い方で表現し始めた人たちの気持ち、これは想像にかたくない（明治期ですかね？）。

『日本の弓術』の中に、上達を焦る弟子をいさめるために、師範が神技を見せるシーンがあります（確か、的の前に立てた線香の火を一本目の矢で消し、その矢のお尻に二本目の矢を命中させる、だったかな…）。これを見てヘリゲル氏は自分が習っているものが西洋式に理解していた単に「弓」の「技術」や「スポーツ」ではないと気づいていく、そんなシーンです。

この神技エピソード、いわゆるスポーツ選手の「ゾーンに入る」とも違うんですよ…。当てるというだけなら僕レベルでも、外れる気がしない時がある。スポーツ競技者として熟達すれば、その上のレベルもある。でもこの本の趣旨は、そこと違う次元です。……なんて言いたがるのを見ると、僕も、口では「弓術でもいい」なんていいながら、「道」的なものを心の底では好んでいる日本人なんだろうな。

町の弓道場でも、年末年始は打ち納め・打ち始めみたいなことやってるかも。寒いけど、日本の正月らしいし、近くにあつたら散歩がてら見物に行ったらどうでしょう。あっ、最後に、弓道誤解あるあるをひとつ。アーチェリーと違って、弓道は的のどこにあたって、点数は同じです。